

空



2008年

SORA 24号

晴夜 (24) | 2

柴田 佐知子

色鳥の嘴を小さく群れ来る

子を恃む父となりたり一位の実

雁やはらかならの死を父は忘れ

秋空の端赤くして煉瓦館

鯛雲町の由緒を声にして

秋天を割つて跳ね橋上りけり

越えてきし海の色なる小鳥かな

汐匂ふ町を歩きて秋惜しむ

裏切りの章

荒井千佐代

血の色となりし苺や登四郎忌

採用面接採用側に座し汗す

自動ドア開く夏果ての渚へと

溽暑なり極彩色の中華街

いまユダの裏切りの章ハンモック

ミサオルガン閉づ秋蝉か雨音か



この家を建てた時に母が植えてくれた百日紅の花が、三十年目の今年はじめて花を咲かせた。「花の咲かない木ばかりでは淋しいでしょう」と、母が実家から

潮枯れもせず耶蘇島の百日紅

女滝見しあとの男滝のつまらなし

秋風や魚板の罅のふかみつ

兎ら眠る空蟬の木に囲まれて

秋ひでり誰へか我が血与へ来し

蟬涙が見る間に垂れて白桔梗

納骨了ふいよよ密なる罽雲

しなやかに鯉の尾鰭や秋の昼

朱蠟燭百本立てて秋惜しむ

移植してくれた心の籠ったもの。季節が巡ってくる度に「今年も咲かない」とがっかりしながらも、常に慈しみ愛でる存在の木だった。

実際、新築と同時に植えた他の木々は大きくなりすぎ、もう何本も伐り倒した。だが、いつまでたっても目立つた成長が見られない瘦身の百日紅は、宝物のように大切にされ、大きな繻の木と柘植の木の間に静かに三十年を過ごしていた。

この夏私は、先日逝った姉のこと等で慌しく過ごしていたので、三十年を経て初めて咲いた淡いピンクの可憐な花に気づいたのは夫の方だった。悲しみの最中だったので「天国の母が咲かせてくれた」と、家族で大喜びした。私は、この細やかなお恵みに涙した。

姉二人を享年四十九歳と、六十一歳で亡くした私。来月初めて、某箇所の癌検をする。神のみがご存知である。私があと何回母が植えた百日紅を見ることができるか。

初句集

服部 早苗



今年の夏は北京オリンピックをテレビで堪能した。そしてもうひとつ四年に一度の行事、埼玉県鶴ヶ島市脚折地区に江戸時代から伝わる降雨を祈る「脚折雨乞い」を見物できたことはうれしかった。

新涼の足裏シンクロナイズドスイミング

鬼灯をほぐす思ひのほか上手

中高と赤子ほめたる稲の花

震災忌まだ九つの母がぬし

ビニールプールひとつたんで夏終る

照敏忌秋風交差してみたり

八月三日の炎天下、最寄りの駅からどこにも日影のない道を二十分歩き続け、雨乞いの行われる雷電池かんだがけいに着いた頃には汗々々々。池は鬱蒼とした森の中にあり、鴨の七、八羽がのんびりと泳いでいる。神域とはそういうものか、さっと汗は引いてゆく。池全体を見渡せる場所を探し、腰をおろして待つこと三時間。この間、持ち込んだお弁当を食べたり、子供たちのミニ雨乞いを見たり、鴨のこれからのことに思いを馳せたり。(多分、鴨にとっては阿鼻叫喚の事態となるう)。やがて、竹八十本と麦藁五百七十束で作った長さ三十六メートル、重さ三トンの龍神(白鬚神社で入魂)は三百人の男たちに担がれ、二キロを練り歩いた後、池に到着する。その体表面はうるこを横して、青笹が被う。裂けた口、

神保町にて『猫町』入手

邂逅の秋澄む師の初句集得て

人亡くて色濃くしたる唐辛子

信楽に澄みゆく秋をみたしけり

塩焼の魚二尾でよし豊の秋

地方紙の第一面の秋桜

豆柿のひたすらといふ稔り方

白洲次郎の銀のライターひやひやと

病む母に日ごと秋の日透きとほる

霧の海ぬけて気分の変はりけり

大きな目玉、耳までついている。雷電池は大人の膝上ほどの深さ。三百人の男たちは龍神を担ぎ、注意深く池に入つてゆく。全長三十六メートルの龍神は池の半分を占領する。そして、ぐるぐると回りはじめ。池を囲む観客は「雨降れたんじゃく、ここに懸かれ黒雲」と雨乞いのかけ声を斉唱する。この間三十分程。鴨の一群は突然の事態に逃げ惑う。追いつめられ、逃げ場を失い、ついに龍神の背に乗つて、じつとしてしまうものもいた。最後、龍神は担ぎ手の男たちにより、池の中でわずか十分程で解体され、「昇天」となった。池には骨組みの竹が無惨に残り、藁が池一面に拡がった。この藁には何かご利益でもあるらしく、一抱えも持ち帰る人がいた。私も藁しべ一本手にしたが、帰り道いつのまにかどこかに失つてしまった。あの日以来、今年は集中的、局地的に豪雨となる日が多かつたように思う。

秋の星

高倉恵美子

老人はカタカナ嫌ひ鳳仙花
 露草を引くに力の要りにけり
 敬老日留守番となる雨となる
 我儘も夫ありてこそ稲の花
 曼珠沙華茎のみ残る畦となり
 刃を入れて抜き差しならぬ南瓜かな
 相槌を打つ友も逝き秋の星
 死してまだ爪の伸びをり百日草
 猫じやらし生き残りては化粧する
 烏瓜疎まれながら赤さ増す



今年は水害も虫の被害もなく定規を当てたように真つ直ぐに伸びた稲田がきれいだ。町に住む友人が「義姉が入院して若い甥夫婦だけで稲刈りをするというので隅刈りでもと手伝いに来たけど仕事がないのにびっくりしました」と言う。私が「以前は几帳面に田の隅まで植えていたけど機械が入るのに邪魔だからと若い人たちは最初から隅を刈る手間を省くために植えないでおくとよ」と説明すると「そうなんですか、今はもう人の手は要らないんですね」と感心していた。

収穫はコンバインの後ろに軽トラックが付いていき、袋がたまるとすぐにカントリーに運ぶので自分の田の粗などしばらく見たこともない。手作業で大変だったが昔

空 作 品 抄

柴田佐知子抽出

破蓮の打ち重なりて暮れにけり

朝寒や兩掌に挟む犬の貌

いまユダの裏切りの章ハンモック

豆柿のひたすらといふ稔り方

相槌を打つ友も逝き秋の星

郭公や旅の朝餉は浴衣着て

園丁の縄提げてゆく冬隣

若鮎の腹はち切れて焼き上がる

寒鯉の背鰭横切る山の音

冬木立全てを見せて揺ぎなし

山伏の里に鬼面や寒に入る

怖づ怖づとやがて自在に踊りけり

暗闇にまなこの白き蝮酒

気安うに触らんといて濃竜胆

里祭神馬いきなり駆り出さる

光のみ愛されてゐる蛍かな

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部 早苗

うきは 高倉恵美子

福岡 樋口みのぶ

福岡 青山 悠

粕屋 秋 千晴

福岡 あさなが捷

糸島 小林 朱夏

須恵 苑 実 耶

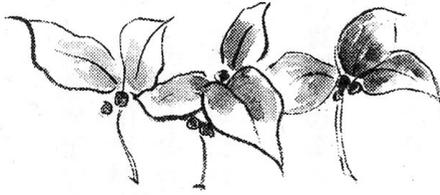
福岡 中条さゆり

福岡 吉村 摂護

八尾 田岡 千章

福津 野畑小百合

東京 今井 春はる生お



空蟬の爪が貫くつばきの葉

凭れあふ稲穂を割つて刈りはじむ

まだ断てぬ思ひの中へ稲光

さまざまの色を浴びたり花火の夜

紅さして足の先まで祭の子

秋立つと頬をゆつくり撫でにけり

天高し聳ゆるものを従へて

マンションマンション快速列車彼岸花

身ぐるみ剥がれて案山子はただの棒

垂直に涙は落ちて空高し

リハビリの効果確かや小鳥来る

瞬きを軽しと思ふ今朝の秋

鯛雲引き絞りつつ日は落ちぬ

闇裂きて牡鹿現れたる神の森

日暮れても一途に赤き曼珠沙華

豊年や高野豆腐に味しみて

長崎 鳳 蛮 華

熊本 田 島 洋 子

大阪 青 木 朋 子

羽曳野 織 田 高 暢

神奈川 上 村 和 子

神戸 石 川 叔 子

行橋 安 武 晨 子

福岡 桜 三 奈 子

横浜 小 川 涼 子

福岡 星 原 悦 子

福岡 大 地 真 理

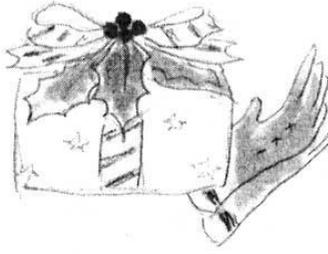
東京 荻 悠 子

福岡 森 紀 子

福岡 犬 丸 勝 子

福岡 田 代 貞 枝

大阪 堀 江 惠 子



月の夜や真つ逆様の大道芸	神奈川	及川木栄子
広島や母の自慢の子供たち	萩	岸千手
とんぼうに飛び交ふ高さありにけり	福岡	矢野百合子
姉の忌に姉妹そろひし小六月	福岡	ふじの茜
月見草砂地に昼の余熱あり	東京	遠山のり子
脇道に入りて目が合ふ蝮蛇草	北九州	每熊美智子
庭先の茗荷刻みて朝迎ふ	福岡	川崎よしみ
葉吹雪の中に大樹や秋収め	鎌倉	永原朱
山のもの冬芽立ちたる千社札	北九州	片田きく
秋まつり足がよろこぶ肩車	佐賀	堤堅策
刀礼の膝折る床の凍ててをり	武蔵野	柴田正悟
大伯父とゆつくり話す菊日和	福岡	田中美穂
鏑矢の逸れゆく果てや天高し	福岡	中原俊也
兵たりし頃の傷なく鱗雲	福岡	神谷耕輔
立秋の阿蘇へ入りたる旅靴	宇美	内藤玲二